研究発表要旨

感染症の時代のD. H. ロレンス
———マードックの言葉を手掛かりにして読む『チャタレー夫人の恋人』

野口　ゆり子

新型コロナウイルスが流行しだしてから3年が過ぎた。この感染症の世界的流行が始まったころ、100年前のスペイン風邪の流行と似ているということが話題になった。100年前と言えば、D. H. ロレンス（1885-1930）が生きた時代である。スペイン風邪は第一次世界大戦中、兵士たちの移動と共に世界中に広まった。ロレンスは戦争には行かなかったものの、大戦とスペイン風邪を生き延びたと言える。彼の最後の小説『チャタレー夫人の恋人』(1928）には戦争と感染症の影響を受けた人々が登場する。

この小説を読むとき、マードックの論文「言葉による救済」を思い出さずにいられない。彼女はこの論文のなかで、文学が我々の「生存」と「救済」のために最も重要だと述べている。なぜ文学なのかというと、「言葉は我々が人間として、そして、道徳的、精神的行為者として生きる場所」だからである。本発表では、肉体の愛を描いた作品だと思われている『チャタレー夫人の恋人』が、マードックの言う「言葉による救済」を理解させてくれる小説であると考え、三つの言葉をキーワードにして考察していった。

まず、第一次世界大戦とスペイン風邪の関係を考察し、この二つの影響を受け、人生が変わってしまった人々が『チャタレー夫人の恋人』に登場することを見た。そして、この物語で重要な「優しさ」と「勇気」という言葉について考察した。今までの日本語訳についても考察し、ロレンスの思想を十分に理解するとどのような訳になるのかを考えていった。

次に、「触る」という言葉について考察した。ロレンスは五感のなかでも触覚を重要視していることを「無意識の幻想曲」のなかで書いている。「触る」という行為は聖書にも見られる重要な行為であり、癒し以上の意味を持つ行為であることに触れ、ロレンスの「あなたが触った」という短編小説の「触る」行為について考えた。そして、この彼の思想が『チャタレー夫人の恋人』のなかにも描かれていることを見た。

最期に、この小説が手紙で終わっていることを考察した。メラーズが手紙に書いている「貞節」とは性的な「節操」であり、彼がもともと知的な人間であること、そして彼が人として正しい道を歩もうとしていることを考えると、メラーズは古代ギリシアの四つの徳「知恵、勇気、節制、正義」を具現化した存在であることを明らかにした。

時代の本質、人間の本質を『チャタレー夫人の恋人』で描こうとしたロレンスは、慢性感染症の結核を発症して死亡した。この小説は感染症の時代を生きたロレンスが書いた、哲学的な作品だったと考えることができる。

ロレンスが描いた時代の本質、人間の本質はどのような時代でも変わることはないだろう。現代の人々は『チャタレー夫人の恋人』に描かれたコンスタンスとメラーズに少なからず共感を覚えるのではないだろうか。この作品のなかにロレンスは生きている。そして、この作品を読んで共感を覚えた読者もまた、この作品と共に生きることができる。私たちの「生存」と「救済」のために、文学が最も重要だとマードックが考えた理由が、この作品を読むとよく理解できるのである。